

山田五郎＝作 ● 山室正男＝絵



オレンジ色のメヌエット



理論社刊

オレンジ色のメヌエツト

山田五郎=作●山室正男=絵



理論社

山田五郎

1937年東京・下谷に生まれる。戦争中、千葉県市原郡姉ヶ崎に疎開（姉ヶ崎小学校）、のち、東京・御徒町にもどる（御徒町中学校・都立江北高等学校・上智大学）。旅を好み、ヨーロッパに遊び、パリに滞在する。現在『月刊専門料理』編集長（柴田書店刊）、『懐文庫』主宰。
住所＝東京都保谷市本町 6-16-14



作者 山田五郎（やまだ・ごろう）

NDC 913 A 5 変型 20cm 302p

画家 山室正男（やまむろ・まさお）

1978年初版 8393—31511—8924

オレンジ色のメヌエット 1982年7月第六刷発行©

制作 小宮山量平 発行 山村光司 発行所 株式会社 理論社

住所 東京都新宿区若松町15-6 電話 03(203)5791 振替口座 東京 9-95736

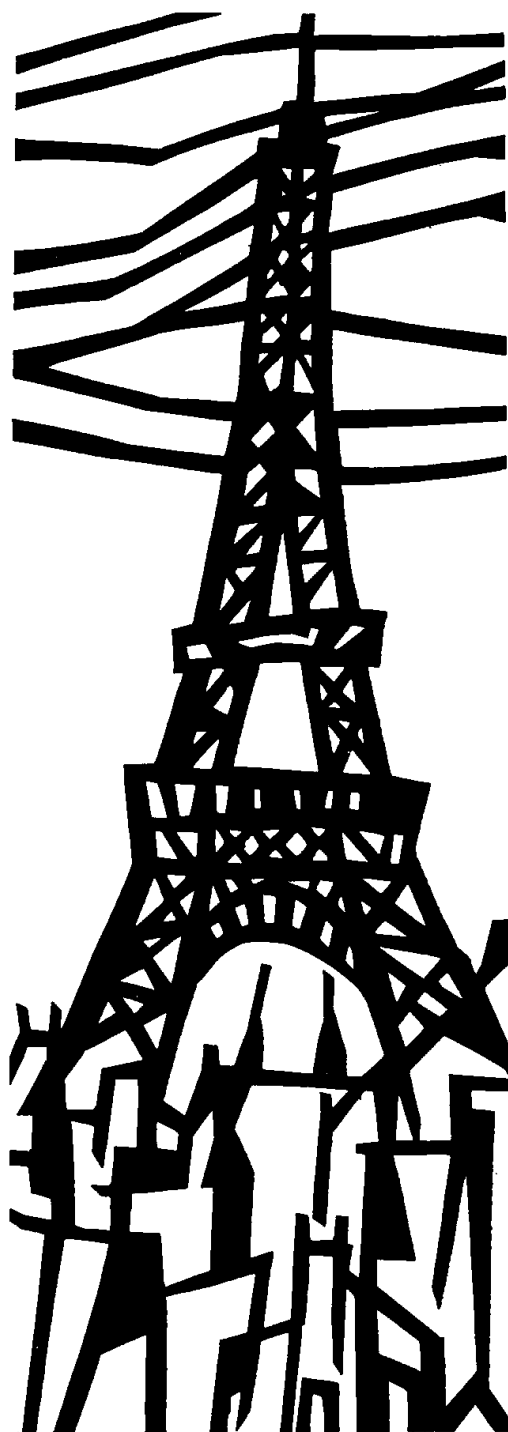
オレンジ色のメヌエツト

——この物語をキャティへの鎮魂歌としよ

もくじ

1	メヌエツトが聞こえる	7
2	ミラボー橋にいた女神 めがみ	22
3	ヒトの間をイヌから見れば	39
4	わが放浪は狼 おおかみ のうた	56
5	ゆえにわれ在り あ	88
6	ゴムとカラシが燃えるとき	126
7	極東のオノコ、只今参上 ただいまさんじょう	152
8	生きるために食うのではなく	179





「あとがき」あるいは「駄^だ人^{じん}に伝えたいこと」… 299

エピソード キャティへの^{なみだ}涙… 289

11 オレンジ色のメヌエット… 259

10 旅はヴェロにのって… 239

9 青春の眩^{まぶ}しい日々… 214

この物語に登場する主な犬物および人物

キャティ

物語の主人公。駄犬であることをなげきながらも、その運命に従い、自叙伝風に物語をはじめ。

ドワイヤン

犬界での哲学的思考を拓める長老犬。キャティは芸術橋でこの長老とめぐり会い、弟子入りする。

ローザ

ドワイヤン一門第一の可憐犬なるも、間もなく去り、キャティとも別れる。

マミイ

ミラボー橋近くに住む老婦人。キャティの恩人。

ジャンヌ

マミイの一人娘。ヴィキと結婚し、ポルト・ド・サンクルーに住んでいる。洋がらし製造会社に勤務。

ヴィキ

ジャンヌの夫。白系ロシア人。さまざまな職業を遍歴し、今はゴム加工会社に勤務。



ナヌウ ヴィキとジャンヌの間にできた娘。ココの姉。

ココ ヴィキとジャンヌの間にできた息子。ナヌウとは一つちがいの弟。

アキラ マミイのアパルトマンに下宿する、極東からやってきた留学生。

エリアス エジプトからきた彫刻家志望の留学生。アキラの前にマミイ宅に下宿していた。

イザベル フランス人の女子大生。アキラの恋人。

イヴエット キャティが幼少の頃、世話になったイタリアー広場に住む老婆。

バタイユ マミイの隣家のヴィオロニスト。キャティの好むメヌエットをときに弾く。

その他



切り絵 山室正男



第1章

メヌエットが 聞こえる……



あいた。音がしないようにカギをあけると、アキラは扉を動かして出て行った。アパルトマンにアソンスール（昇降機）が付いているが上り専用で、下りには使用できないようになっていた。アキラは部屋のある六階からコトコト、階段をおりて行った。早起きのコンシエルジュ（門番）のおばさんは、もう、アパルトマンの玄関口をそうじしているにちがいない。

アキラがこんなに早く外へ出てゆくのは、ちょっととした買物、ブーランジェリー（パン屋）へバゲットでも一本仕入れに行くのだろう、じきに戻ってくるにちがいない。

わたしは、部屋の片すみにあるショファージ（暖房機）のそばで微睡んでいる。この街で、二月の朝七時といえば、まだうす暗い。だのに、勤めをきちんともっているヒトは、急ぎ足でメトロの方へ駆けるように進んでゆく。くつ音が、カチカチと寒空に響いている。

アキラが帰ってきた。案の定、バゲットをかかえて、昇降機からおりる音で、わたしにはすぐアキラ

だとわかる。

昇降機は下りにこそ使えないが、上りはこのアパルトマンの住人であろうと、訪問客であろうと、自由に使えることになっている。目的の階で乗りすてたら、ボタンを押してレッドシヨセ（地階、つまり一階）へ送り、次の客に備えるのが常識というのか、礼儀だ。この昇降機、なかなかの年代ものらしくモーターのまわる音がウウウ、耳ざわりだが、それでも一向にこわれる気配をみせないのは、わたしの軀みたいなので、外見よりも、ちがいにいい。

昇降機からおりる時だが、まず内扉を手前に引いて、外扉を外側へ放りだすようにして出てくるのだが、これにもなかなかこつがあるらしいのだ。内扉はバネになっているから、手放したとたんに閉まろうとするし、おまけに観音開きになっているから、へたをすると指のひとつもはさもうという代物。かといって、内扉に氣をとられていると、外扉がその自重で、もとのさやにおさまろうとする。あわや、サンドイッチになりかねない。こんな些細なこと柄にも、素人玄人、というのもへんだが、熟練者と未熟練者のちがいはある。熟練者ともなれば、つま先でチョコンと内扉のすみをおさえるとか、肩で外扉をのけるようにして出てくるとか、いろんな手法がヒトビトにあるらしく、一様に言えることは、とにかく動作がスムーズ、たてる音が小さく、リズムカル。

どうしてこんなことをくどくどと述べなければならぬかといえば、アキラの昇降機の使い方ときたら、てんで見てはおれないほどのものだからだ。ちぐはぐな音をまき散らして降りる姿はへ極東の無器用男の異名を与えたくなるくらいだ。

ちぐはぐな音もいいが、ほら、あのパンの抱え方、見ちゃいられませんよ。全くさまをなしていないではないか。一メートルもあろうという長いパンだから持ちづらいといえはそれまでだし、それにどう

持とうと大きなお世話かもしれない。が、アキラがパンを持つ、するとパンが嫌がっているようでもあり、アキラの方は嫌がるパンを持ちあぐねている風に、どうしてもなってしまうのだ。

そこへゆくと、この街に住みなれたヒトビトは、実にパンを上手に持って歩くものだ。ご婦人の場合は、サック（ハンドバック）でもかかえるように、そう、アクセサリーに近い。男でもベレエ帽被ったおじさんなんか、バゲットをかかえて歩くさま、なかなかの趣である。

こんなことから、アキラがこの街へ来て間もない外国人、つまりエトランジェであることがわかる。そんな彼でも近頃、台所へいって珈琲をいれる、その手つきがめつきり上達したようだ。牛乳をわかす。この二品をまぜて砂糖をいれると、世にいうカフェ・オ・レである。

先ほどアキラが抱えてきたバゲットを二つ割りにして、間にバターをぬると、これがタルティヌ。この国では、カフェ・オ・レとタルティヌがあれば、もう立派な朝食で、なにしろプティ・デジュネ（小さい昼めし）と呼ぶくらいなものだから、昼食の添えもの的存在にすぎない。

アキラはその付随的食事をすませると、外出の準備をはじめた。そこへココとナヌウが起きてきて、寝呆け眼で、アキラにお早ようのべせ（頼ずり）をおくっている。ココもナヌウも学校に遅れるといけないから、何はともあれ洗面所へ入って、身づくろいしていると、マミーが起きてきた。彼女は夜ふかしが好きで、朝は苦手ときているが、そこはわが孫かわいさで、パッと寢床からはね起きると、のっけからココとナヌウによびかけている。

——歴史の教科書、いれたわね。算数の宿題、ほら、テーブル（テーブル）の上に置きっぱなしじゃないの。ナヌウはいつもこうなんだから。ココ、体操着いれたわね。

孫たちの朝食づくりにも手の方も忙しいマミーだ。

そうこうするうち、アキラは先に出て行ったようだ。今日は週のはじめだな、とわたしはおくればせながら気づく。あれでも学生かい、と思うくらいぐうたらな生活をしているかと思えば、今朝のように几帳面に出てゆくこともあるのだ。

ココやナヌウに較べると、年齢差ということもあるうけれど、エレヴ（生徒）とエテュディアン（学生）のちがいは確かにある。アキラは、アンテリジャンス（利口）を振りまわすわけでもないのにとことはなしにエテュディアンのやわらかい風が立つようなのだ。

次は、ココとナヌウが急ぎ足で出てゆく。

—ヴォワチュール（自動車）に気をつけるのよ！

マミイがふたりを送りだしてしまうと、急に家の中が静まりかえって、ほっ、というマミイのため息、いつものクセ。台所へ行って、ようやく自分の番がまわってきたかというふうには、珈琲と牛乳をわかしなおして飲んでいる。わたしにも専用のボル（井）にカフェ・オ・レを注いでくれる。わたしははじめこの奇妙な味の飲みものを嫌ったが、慣れてくるにしたがって、起き抜けのいっぱいとしては格好の飲みものと変ってきた。ただ、マミイがうっかり熱いのを注いでしまう時、このときは参る。ヘネコ舌などというが、わたしも苦手なのだ。それから、ガブガブ飲むこともできない。なめるようにして、それでも割方、じょうずに喉を通すのだが、マミイはわたしを見おろして、やれやれ、今日も夕方までお前とふたりつきりかい、という顔つきになる。クセのようなものだ。こうして、マミイの家の一日ははじまる。

*

申し遅れてしまったが、わたし、キャティ。この際、はっきり言っておきたいのだが、それというのも、わたし、ヒトではなくイヌだからだ。いや、そんなにへんな顔しなさんな。あなたとわたし、ヒトとイヌ、遠い昔から友達、ともだち、そう友達、ね。

そりゃ、たまにはイヌ・チクショウなどと蔑あやうまされてきて、生きとし生けるモノの中で最低の位置を占めざるを得ないはめに、しばしば陥おとれられてはきた。だが、その反面ではヒトと一番親しい間柄まがらであり、イヌ・チクショウなどというのも、一種の親愛しんあいの表現くらいに、わたしなどは考えているのだ。

そりゃ、イヌはヒトに養やしなわれ、その逆は決してあり得ないことだが、養やしなわれている御礼ごれいの気持をもこめて、愛玩あいがん的存在そんざいであろうとしたり、実用的にも番犬ばんけんとして、あるいは獵犬りようけんとして、ヒトビトに貢獻こうけんしてきたイヌの歴史的事実も忘れてもらいたくない。

わたし自身、イヌとしての美点をどのくらい備そなえているかは別として、イヌにはイヌなりのケン生せいがあり、ケン格かくもあり、イヌとなりも仲間うちでは問とわれるところとなる。

喜怒哀楽きどあいろくを日々を感じ、光かがやく、ふり返ってみれば眩くらしいような思春期もあった、青春期もむかえた。わが道にゆきずまりを感じて、家出を試みた若い日もあった。食うものも食わず、飲むものも飲まずとも、なお生きぬく力を当時のわたしはもっていた。潑刺はつらつとした毎日だった。放浪ほうろうのなかに、輝く未来をみつめた日もあった。

いま、マミイが針仕事をしているそばで、だらしなく寝そべて、うつらうつらとわがケン生せいをふり返ってみると、この街まちせましと歩き廻まわった若き日々こそ、この世の輝けるスーヴェニールではなかったかとも考えてみる。

ひとり生き抜く才覚さいかくもなし、若さも失ったと感じはじめたある日、マミイとの邂逅かいこうがあった。いや、

マミイにしてみれば、慈悲であつたかもしれないが、わたしの方からすれば「出逢い」と思いたい。まあ、その出逢いが幸であつたか、不幸であつたか、イヌ仲間でも意見は二分されていたものだ。

節をまげて、ヒトに従い、養われる生活を侮蔑のまなざしで見送つたイヌも少なくはなかった。だが、もの事には成り行きとことがある。主義主張も結構だが、力まずに流れにまかせる方が、はるかにましいな結果をまねく場合があるものだ。

その頃、わたしは六歳ぐらいだつたと思う。イヌの世界では、——お歳は？……などと聞かれる気がかいはないので、どうでもよいようなものだが、ヒトの年齢に換算すれば中年というところだろうか。ヒトの世界で六歳といえは、まだ幼児にすぎないが、イヌでいえば壮年、働きざかりというところだろう。イヌの種類によつては、あるいはえさに恵まれないイヌによつては、老年の入口にさしかかつているといえる。今後はケン生の坂道を下る一方であることを意識せざるをえない年齢でもある。行く末をおもんばかる、という思慮深さを持ち合わせているわけではないが、少しは歳のことも考え、分相応の生き方、ヒトに飼われる生活の方が、この際だから……という下心もないわけではなかった、と思う。そりゃ、いやな思いをしたことは一再ではなかった。ヒトと共に生活する、といえは体裁はいいが、おのずと主従の関係は明らかではないか。わたしとて「飼われる」という感覚は持ちたくはない、持ちたくはないが少し考えを及ぼせば、どうしてもそこへぶち当たってしまう。どんなご主人にしろ、歯向うなど現代のイヌにとっては、滅相もない。

天はヒトの上にヒトをつくらずヒトの下にヒトをつくらず、と言うような言葉は、どこの国にもあるらしい。だが、イヌの上にヒトをつくらず、も、イヌの下にヒトをつくらず、も、聞いたことがない。つまり、大方のヒトにとってイヌは眼中にないのだ。特にわたしのように番犬としての素質にめぐま

れているわけではない、と言って獵犬^{りようけん}向きでもない、眼の中へ入れても痛くないという類^{たぐい}の愛玩^{あいがん}用からはほど遠い、こういうイヌの存在価値は、ヒトビトにとって極めて低いと言わなければなるまい。わたしはへ無芸^{むげ}大食^{たいしょく}を自認^{じにん}せざるをえない。

*

ある日、マミイの留守^{るす}中のことだったが、ポルト（扉）のところにつかつかつと荒い足音。わたしはこの家^やに出入りしているヒトの足音なら、概ね^{おおよそ}区分がついているつもりだったので、多分、隣の家に用事のあるヒトだろうと思っていると、わがポルトのクレ（鍵^{かぎ}）がいつも軽々と解^とかれる音がした。あっという間もなく、天をつくような毛むくじやらの大男がわが家に侵入^{しんにゅう}してきていた。それだけではない大男はわたしの存在を全く無視して、部屋^{へや}の中をひとあたり見まわすと、金目^{かねめ}のものはないと睨^{にら}んだか、つかつかつと一点めがけて大股^{おおまた}で歩きだした。サラマンジェ（食堂）の壁にかけてあるタブロー（絵）をひょいと外^{はず}すと、大ぶりの布^{ぬの}にくると包む、その手つきの鮮^{あざ}やかなことといったらなかつた。

感心している場合でないことは、百も承知しているのだが、つい、見惚^{みと}れていたら、大男、入ってきた時の大股^{おおまた}を再び使用して、何くわぬ顔で出て行ってしまった。ヒトはあれ程までにへ何くわぬ顔^{かお}ができるものだろうか。あれじゃ、アジャン（お巡り）が注意深く見ているもヴォールル（泥棒^{どろぼう}）とは気がつくまい。マミイに言いつかって、忘れ物をとりに来たという態^{てい}だ。そういうわたしだって、ありや他ならぬ泥棒様じゃないかと気づいたのは、そうさね、大男が出て行って五分も経^たってからだったろうか。

そんなことはどうでもいい。問題はあのタブローだ。あの絵はマミイのマリイ（亭主、でわるければ

夫)が、この前の戦争で亡くなる前のことだが、趣味として描いたものだということだ。マリイがひとり娘のジャンヌをつれてブルターニュ地方へヴァカンスに出かけ、その時に描いたものだそう。裏をかえすと《La mer et ma fille》(海と娘)と記してあり、署名「Jean」も読みとれる。

戦死——突然の知らせを受けたマミイの悲しみを、わたしは見届けたわけではないが、その深さは想像にかたくない。途方に暮れていたマミイに残された、ジャン氏の最大の面影が宿っているものは何といても、今も去られた一枚のタブローなのだ。ついでながら、マミイはジャンヌが男児誕生と聞いたとき、迷わず夫の名前をそのままジャンとつけた。わたしたちはジャン二世を、どういうわけかココと呼んでいる。

絵は数年の間、寝室に飾ってあったそうだが、わたしの知る限りではサラマンジェ(食堂)の真白な壁にただ一点《La mer et ma fille》がかけてあったのだ。

この部屋に入ってくるヒトビトは、一様にこの絵を誉めそやすが、それはマミイとこのタブローの關係を知ってのうえのことであって、内心、どう思っているかわかったものではない。ヒトはどんな綺麗事を並べても、心の奥では別事を考えている場合があることを、近ごろようやくにしてわたしはのみ込めるようになった。

だが問題は上手・下手の段ではない。あのタブローが消えたことを知ったら、どんなに悲しむことか。悲しむ、というような生やさしいことでは済むまい。それにしても、あの太男、なんでよりによってタブローなんかに眼をつけたのだらう。上手、といったところでアマトゥール(素人)間での話ではないか。画商の眼というのは案外に確かなものだと聞く。その網の目をくぐって、値のつくはずもあるまいに。彼奴こそ、アマトゥールではないのか。モノの値が踏めない、昨日今日のかけだしドロではないの